

いた。闇の底で揺れていた6月の草だ。朝の公園には何もなかった。透明な紙つぶてに似たものも、深淵も、光の独楽も、量子の乱舞も、一切が姿を消していた。あの草の宇宙とでも呼ぶべきものは、いったいどこへ行ったのだろう。X氏の頭のなかには、それらの姿はくっきりと刻まれている。眼の底に映っていた。X氏は、耳鳴りを不快に思いながら、ホッと胸を撫でおろして、駅へと続くなら坂をのぼっていった。

朝の駅に固有の静かな熱気が漂っている。力で漲っている駅へ、どこからともなく、雨傘が集って来て、秩序正しい行列が、無言のまま、濡れたブラッドホームにのぼっていく。誰が強制している訳でもないのに、どの眼も、羊色の色彩と静かさをたたえ、やわらかい光を力なげに放っている。いつの頃から、人々の朝の眼が、そのように染まってしまったのだろう。何かが眼の色を変えたのだ。少し前の、混沌が日常そのものであった頃には、叫び声があり、苛立ちがあり、不安があり、それらの力がそのまま眼にあらわれて、鳶色に輝やき、燃え盛る炎となっていた。あの鳶色の眼も、いつのまにか、どこかへ姿を消してしまった。そして、誰も、消えてしまった鳶色の眼のことを口にしなくなった。街にあふれているのは羊色の眼ばかりだ。

満員電車が時間を告げながら滑り込んで来る。X氏は、吊皮を握って、電車の振動に身をまかせた。57分間の辛抱だ。風景も昨日のままだ。いや、眼はものを見ていない。ただ流れていく風景を写しているだけだ。揺れている。朝の苦業は、日に日に辛くなる。肩が触れる。無視する。もう一

度肩が触れる。若い男がX氏の横顔を覗き込む。揺れる。眼が合った。

風景が消えた。仄暗い闇が来た。車内に灯が点いた。窓が鏡になる。ふたたび、眼が合った。眼だ。若い男の眼が鏡のなかで、鳶色に光っている。火花を散らせる眼の力がある。他人の顔など、まじまじと視るものではない。眼を離すが、鳶色の眼は、X氏を追い、視線が執拗に絡みついてくる。繊細な白い青年の手が硬い棒になって揺れている。全身が硬直している。X氏は、青年の気質を見抜いてしまった。宙に遊ばせていた眼を閉じて、数秒間、青年の危険な気質のことを考えた。長い間、忘れていた鳶色の眼を思い出した。若い頃の自分の眼と重なった。

笑っている眼はおそろしいが、鳶色の眼は、今では怖くはなくなった。鳶色の眼は自分を殺すが、笑っている眼は他人を殺すものだ。そう考えるような年齢になった。ただ、今のような、誰もが羊色の眼をしている時代に、鳶色の眼に出合うとは、偶然にしても、X氏の想像しないことだった。

X氏は待った。もうすぐ、57分間の辛抱が終る。あと、2〜3分だろう。降りる前に、もう一度、鳶色の眼の青年を視たいと思った。しかし、おそろく、自分は、彼の顔を覗き込むような真似はしないだろう。若い男も、人混にまぎれて、どこかへと遠去かっていくにちがいない。

電車が鈍い響きをあげ、ドアが開くと、圧力が加わり、自然にホームに押し込まれる形になって、フッと肩の力を抜いた瞬間に、傘を握りしめている左手に鋭い痛みが走った。左手が強い力で